

酒井和也¹: 報告—第53回日本植生史学会談話会・日本第四紀学会2025年大会巡検Kazuya Sakai¹: Report—The 53rd forum of the Japanese Association of Historical Botany and the excursion of Japan Association for Quaternary Research 2025 annual meeting

第53回日本植生史学会談話会「松江周辺の植生」が、2025年8月28日(木)に実施された。この談話会は8月28日(木)～9月1日(月)に島根大学で開催された日本第四紀学会2025年大会の専門巡検の一つとして、日本植生史学会との共催で行われた。世話人は渡邊正巳氏(文化財調査コンサルタント株式会社)と鳥江夏希氏(島根大学大学院生)で、案内者は井上雅仁氏(三瓶自然館)であった。主に日本植生史学会や日本第四紀学会に所属する8名が参加した(図1)。

当日は朝8:30にJR松江駅南口を出発し、車で10分程移動したのちに、田和山史跡公園に到着した。田和山史跡公園は宍道湖南東岸の丘陵に位置し、弥生時代の集落遺跡である史跡田和山遺跡と標高約50mの丘陵地、「田和山の森」からなる公園である。参加者はまず案内者の井上氏から田和山の植生について案内を受け、散策路に沿って植生を観察しながら「田和山の森」を登った。田和山の森は



図1 田和山遺跡での集合写真(渡邊正巳氏提供)。



図2 「田和山の森」の林床(林尚輝氏提供)。

かつて、手入れが行き届かず放置されたヒノキの植林地であった。しかし、地元住民らの団体によって2002年頃からヒノキの間伐が行われるようになり、現在はヒノキ以外の多様な植物を交える二次林へと移行しているという。

田和山の森は全体として、間伐によって日光が林床まで差し込んでおり明るい森林であった。入り口から市道沿いに登る道では、林床にヤブコウジ、ツワブキ、低木としてイヌビワやヒメコウゾなどが生育していた(図1)。筆者は、植林といえば林床が暗くわずかな植物しか生育しないイメージがあった。しかし、植林であっても間伐によってこのように明るくなり、多様な植物が生育できるようになるものなのかと感動した。田和山の森では、絶滅危惧種であるキンランも観察できた。キンランの生育には、明るい環境に加えてブナ科樹木・菌根菌との三者共生が必要とされる。井上氏によれば、近年では移植の際に明るい森林でブナ科樹木とキンランを共生させることで保全に成功しつつあるという。田和山の森でも、間伐によって林床が明るくなった後、キンランが増加しているとのことであった。

また林内にはクスノキやタブノキ、ノグルミなど暖温帯性の高木の生育が確認できた。クスノキは樟腦の原料として知られており、島根県の見石銀山では鉱山病対策としてクスノキの枝葉を煮た蒸気を坑内に送り込んでいたと井上氏から伺った。そのほかにも散策路沿いではクロキやサカキ、カクレミノなど多くの常緑広葉樹がみられ、井上氏や参加者の先生方に同定のポイントをレクチャーしていただいた。

田和山の森の丘陵頂上部からは、田和山遺跡を望むことができた(図3)。田和山遺跡は、丘陵上に築かれた弥生



図3 田和山遺跡(林尚輝氏提供)。

